

都市形成史における「空間の感覚」の変遷

加藤 壮一郎*

1. 本稿の目的と背景

スペインのバルセロナ市で、現地の人に、あなたは「なに人ですか？」と問えば、かなりの数の人間が、「カタルーニャ人」と答えるだろう。また、イタリアなどでは、自分の住む都市の名を答える人間も多いに違いない。日本国内で、あなたは「なに人ですか？」と問われたとき、一部の地域、アイヌ民族を除けば、「日本人」と答える人が多い、と推測される。一方で、200年前の日本で同じような質問をしたらどうであろうか。「日本人」という答えは皆無であったろう。「薩摩隼人」、「上総人」…といった答えがでてきたであろう。「日本人」という概念が、近代国家形成におけるフィクションであり、人々の帰属意識は、その地域の歴史、宗教、文化、社会システムに左右されるということはまちがいない事実といえる。また、人間のアイデンティティ形成において、帰属意識というのは、基盤にあるものであることは誰もが疑わないところであろう。

たとえば、ベニス人間が、自分は「ベニス人」だと言うとき、ここには、上記のような歴史的社会的文脈のみならず自分の発達過程において、夕焼け、水面の美しさに感動を覚え、町の路地での遊びなどで、場所そのものとの一体化するような体験も内在しているだろう。こうした文脈に対して、1960年代から、現象学的な見地から「Sense of Place」（以下、場所の感覚）という議論が、現象学的地理学者のトゥアンやレルフなどによって提起され、また、ケヴィン・リンチなどが認識論的な立場から、空間を記号体系に整理した都市デザインの提唱など、人間の個としての意識、無意識に内在する普遍的側面から、場所との関係性、人間と場所との間に介在してくる「感覚」の問題を扱ってきた。ベニス人は、こうした体験を相乗して、更に「ベニス人」としての自覚を高めることができるだろう。

一方で、こうした内的体験は、世界中の人間が体験できることであるが、筆者自身、生まれ育った埼玉県自然やまちに思い出があり、地域に愛着があってもそこに「埼玉人」と言い切れない歯切れの悪さを抱えている。やはり、歴史、文化、社会的文脈によるその場所に形成されてきた見えざる多様な関係性の希薄さがそうさせているのかもしれない。

本稿における問題意識として、こうした人間の空間との関係性におけるアイデンティティ、帰属意識が、多様な「感覚」の複合体であり、都市形成史という先史時代からのスパンを扱うことで、この報告書の基調テーマである「場所の感覚」においても、上記の定義から60～70年代において人間が自覚せざるをえなかった一つの「感覚」の発見としてとらえている。トゥアンは、「空間」は「場所」よりも抽象性が高く、最初は不分明な空間に、意味を与えていくことによって「場所」になると定義しているように（トゥアン 1988）、

* 千葉大学人文社会科学部研究科公共研究専攻（博士前期課程）

本稿においても、その時代ごとに共有してきた「空間」との関係性における「感覚」を扱う言葉として、仮に「空間の感覚」として提示することとした。人間がどのように空間と関わってきたか、やがて社会を形成する過程で都市を形成し、都市は文明と文化を発達させてきたが（マンフォード 1974）、その過程において、「空間の感覚」がどう変遷してきたか、古い時代から幾重にも重なりあってきたこれらの感覚の複合体としての「空間の感覚」がこれから、どこに向かおうとしているのか、を明らかにしたいと考える。

なお、近代社会における「空間の感覚」を大きく論じる必要があると筆者は考えることから、対象地域としては、主にヨーロッパ地域を中心に構成した。

2. 都市形成前の「空間の感覚」人類誕生から都市形成まで～センス・オブ・ハビタット

600 万年前、東アフリカの森に住んでいた類人猿が乾燥地帯へ、二足歩行をはじめたときから人類が誕生したといわれる。我々の直接の祖先、ホモ・サピエンス・サピエンスは約 20～15 万年前にアフリカの熱帯地方で生まれ、やがて、サハラ、南西アジアの洞窟などに住むようになったクロマニヨン人として知られている。彼らは、農業が誕生したといわれる約 1 万年まで、狩猟採集民として、石器などの道具を作るなど、技術を進歩させ、さまざまな環境に適応しながら移動しながらの生活をしてきた、と考えられている。生物学的には、岸由二氏の言葉を援用させてもらえば、生きものたちが示す「世界了解」としての「すみ場所」の選択に関して、生きものたちの多くが遺伝的、安定的に「すみ場所」を選ぶことに対して、人類は、言語能力、社会形成能力、器用な運動能力、それによってもたらされる技術など、様々な場所を「すみ場所」に選択しうる感覚——岸氏はこの感覚を *sense of habitat* といっている——を有する生き物として自然選択を受けてきた可能性が高いということが言える(岸 1996)。なお、以下では *Sense of Habitat* と表記する。

狩猟採集の移動生活の中で、その生存体系の一環となっている動物、植物にアクセスできる感覚（そのために必要でもあった生き物への共感といった感覚も含め）こそ、固定的な「すみ場所」を定めず、柔軟に「すみ場所」を選んでいくことが出来る人類の特性である。その感覚は、現代においても、人工空間に対する愛着などにも柔軟に適応できる「すみ場所」感覚として、遺伝的に内包されている感覚といえる(岸 1996)。

一方、我々の祖先、クロマニヨン人の遺跡を発掘が進む中で、もう一つの「空間」に対する感覚を顕示させるものがある。4 万年前にヨーロッパ大陸に移住してきたクロマニヨン人は、その後 1 万年の間、別の人類で、頑強で屈強で大型動物を捕獲するのに適したネアンデルタール人と共存していたが、やがて、彼らを駆逐することになる。ネアンデルタール人は、我々の祖先と何が違っていただろうか。ネアンデルタール人が割合自然の脅威を避けた場所を選び住み、真夏の間だけステップ・ツンドラへ狩りに出かけるといった固定的な生活様式を持っていたのに対して、我々の祖先は、上記にあげた、どこの場所でも過ごしていける生活能力、社会組織、精巧な道具といった要素が、ネアンデルタール人を追い出すのに十分であったであろうが、さらにこれに踏まえて、彼らと一番違う点、すなわち「見えざる武器」であった、超自然的な精神世界を有していたことである（フェイガン 2005）。クロマニヨン人が住んでいた洞窟には、「狩猟による共感呪術」によって描かれた壁画を多く見ることが出来る。また死者を丁重に葬る行為も発達させていた。これら

の遺跡からは、超自然の宇宙の存在者と人間との間にある精神的交流が記されている。彼らはそこに描く動物を感情のある生きた存在として扱っている。これは「生き物に対する共感」という感覚と通抵しながら、そこを通して超自然的な秩序から自分たちを方向づけるという精神性によって世界空間が形成され、生活空間の構成においても規定するようになった。これらの精神活動の中心にはシャーマンが存在していて、超自然的存在との媒介者として社会的秩序を司る役割を果たした。これらの超自然からの啓示によって、「世界了解」がされ、社会秩序を構成する精神的作業は、後に、エリアーデが宗教的空間の分析によって示唆している、世界が、カオス（混沌・自然）とコスモス（宇宙・人間の世界了解した実在的世界）にわかれ、カオスの世界から、祭式による宇宙再現によって人間が住むコスモスの世界へ帰るといった精神過程の祖型として捉えることもできると考える（エリアーデ 1969）。やがて、これらの感情は、それぞれの土着の発達を重ねながら、紀元前 8 世紀から後 4 世紀までの精神革命（伊東 1985）によって出現したキリスト教などの宗教に合流、吸収されていくと予想される。こうした我々の直接の祖先の特質からは、実在的には、その発生時より、精神的には、「本能が支配する明確な世界から不明確で不安定で、開かれた世界へと投げ出されている」（フロム 1959）存在と言えるかもしれない。仮にこうしたシャーマニスティックな「世界了解」から世界をとらえる感覚を、「センス・オブ・コスモス（Sense of Cosmos）」と呼ぶとしたら、後の都市形成の空間原理においてはまさにそのコスモスの中心とはだれであるか、という変遷の歴史とみることもできるのである。

3. 都市の発生～センス・オブ・コスモス

1 万年前に「農業革命」が起きてその生産余剰物が富を蓄積して、紀元前 3000 年前からの「都市革命」を準備する、というのが従来の定説であるが、こうした歴史観にアンチテーゼをとらえた人間がいた。ジャーナリストで都市運動家であったジェーン・ジェイコブスは、著作の中で、「都市は農村に先行する」というテーゼを掲げて、狩猟採集民であった時代から、人間は、洞窟などに定住生活をしながら集団的生活空間をもっていて、武器の製作に有用な黒曜石などの交易を通して都市空間をもっていた、という（Jacobs 1969）。こうした定住生活をする上の需要において、家畜や栽培植物が発生して、それらが敷衍して農村が生まれた、という仮説を唱えたのである。紀元前 7000 年前に起こったトルコのアナトリア高原のチャタル・ホユック遺跡から着想を得た仮説的な集落ニュー・オブシディアンを通して、紀元前 9000 年頃には、黒曜石の交易から都市が生まれ、家畜、栽培植物が発生して農村が生まれたという仮説を展開している。この仮説は、現代、発掘技術が進歩し、この地域周辺でさまざまな考古学的発見が明るみになるにつれ、彼女のたくましい想像力が、全面的ではないにしろ、考え方においては、正鵠を得ていたものだということがわかり始めている。紀元前 13000 年頃、地球の気候は温暖化しはじめ、降水量が増加した。現在のイスラエルからシリアの南部にかけて、オークとピスタチオが実るベルト地帯ができ、それまで移動生活していた狩猟民のなかに、定住生活を行う集団がでてきた。この 2 つの生態学的領域においては、1 年の別々の時期に食料を採取することができるからである。ナチュフ人といわれる人々は、洞くつを利用して、木の実などを貯蔵し、近くの草原で動物を捕獲することで定住生活が実現した。食料の量が見込めるため、人口は急

速に増加したと予想される。こうした定住生活は、それまでの柔軟な移動生活とは異なり、気候変動による影響、人口の増加に伴う土地をめぐる集団間の争いなど脆弱な基盤の上に立っていた。また、どんぐりなどを食料に変えるには膨大な労働力が生じて、容易に移動が出来ることが出来なくなったことで、それまで採集狩猟生活において保持していた移動力をなくしたといわれる（フェイガン 2005）。

シリアのユーフテラス川沿いに紀元前 1 万 1500 年から、テル・アブレイラという集落(200~300 人規模)があったが、この集落は現在、最古の栽培記録が確認されている。紀元前 1 万 1000 年ころ、乾燥化による旱魃が起り、採集できる木の実や動物の数が少なくなったことで、移動能力がなくなった彼らに食糧危機が起こった。彼らは、森林地帯から草原地帯に生態学的に変化したこの地で、ライ麦や小麦の一種などに目をつけ栽培し始めたと考えられている。その後、1000 年間は、ここでの定住生活は続くが、紀元前 1 万年から 9500 年に温暖化、旱魃が一層厳しくなると、この集落は一旦捨てられた。この間、人々は水のある場所へ集中したであろう。もちろん、この集落以外でも同じような試みがされていたろう、と考えられ、こうした移動がやがて、トルコを経て、農業をヨーロッパ大陸に伝播することとなった。

ここで指摘したいのは、人々が定住生活を始めることで、人間の実存的性質として精神性が、定住した土地との結びつきを深め、祖先が土地の守護神として、気候変動による穀物の収穫の脆弱性ゆえの生死をもたらす超自然の脅威と現世の間を祖先の霊が媒介するという精神世界が形成されたことである。ここでは前述した「コスモス」の原型をなすものとなり、これらがやがて、時間的系統性を意識させた部族の守護神として発達していく。この時点で、空間の把握は、狩猟採集民の移動も含めた柔軟な「すみ場所」感覚から、定住生活によって土地に固定化し、祖先信仰という時間軸も加わった霊的要素が強い「センス・オブ・コスモス」へと移行し始めたと見る事が出来る。

こうした状況において、移動した農耕民によって、紀元前 8300 年頃にトルコのアナトリア高原に多くの集落が発生した。その一部は黒曜石の産地として、これらを取引する都市的性格をもつ集落へと変貌した。チャタル・ホック遺跡(139 戸の集合集落)など、複雑な社会組織が生まれてきたことを証明した。黒曜石は、西は地中海沿岸へ、南はペルシャ湾まで運ばれ、定住地における交易の輸送網ができた。やがて、膨らむ経済行為と人間を養うための農地なども生まれ富が蓄積されていったと予想される。また、ヨーロッパ大陸へ移動した人間も狩猟民との交易などを通して、集落の力を強めてきた、ということが確認されていて、こうして見てくると、気候変動によって定住生活がはじまり、次なる気候変動が農耕を生み、農耕集落が都市的性格を帯びることで、さらに農地が必要となり、富の蓄積が始まり、都市国家へとつながるという経路が確認できる。ジェイコブスの仮説に戻れば、農業の発生の経緯などにおいて厳密な考古学的な意味では違いがあるものの、農業発生時の集落は脆弱なものであり、農業の発達による富の蓄積ではなく、むしろ黒曜石など交易をもつ都市的性格を有した集落が富を蓄積して農業技術や社会システムを改善していき、ウルなどメソポタミアに発生する都市国家までの富の蓄積を実現した、という点においては彼女の仮説は時代、経路ともにほぼ適合している、といえるだろう。

やがて、チグリス・ユーフテラス川の下流に定住したウバイド人は、灌漑技術を身につけ、紀元前 5200 年には、最大級のものでは 10ha ほどの居住地は 2500 人~4000 人まで

の人口規模を抱える集落へと成長し、紀元前 3000 年の頃には、シュメール地方に最大都市ウルなど多くの都市国家が形成されるようになる。中には、ウルクのようにメソポタミア北部やアナトリア高原との交易路のための植民地もつような都市国家もあった。こうした共同体の形成において、人間の運命を支配する自然に対して、豊作などを祈るための霊界との媒介者、かつてのシャーマンなどが、ますます権威をもつようになって、本職の神官としての地位を得るようになる。それぞれの都市は守護神をもち、ジグラットという神殿を構え、収穫物の貯蔵を監督する官僚が現れ、旱魃などによって土地を放棄した人々は都市に集まり、土地の守護神の名のもと、神殿、城壁などの公共事業に従事した（フェイガン 2005）。こうして、都市的な中央集権機構をもととした「センス・オブ・コスモス」による空間構成はほぼ形成されたといっている。コスモスの中心者は、それぞれの都市の守護神であり、エジプトの太陽神、また時代は下るが、中国の都城建設なども基本的には「皇帝」を頂点としたコスモスの形成であり、これらの基本的な感覚構造は変わらず、近世の絶対王政時代まで、コスモスの中心が、西欧と東洋ではそれぞれ違いがあるものの徐々に世俗化していく過程をへて変遷していく、と考えられる。

4. 多神教から一神教へ～センス・オブ・ゴッド

紀元前 2100 年になると、メソポタミア地方では、ウルク第 5 王朝の国王の息子であったウル・ナンムが、影響力のあったウルの第 3 王朝の国王として、メソポタミアの各地にあった都市国家を統合して強大な支配を固めるようになった。その際、世界最古の法典といわれる「ウル・ナンム法典」を制定した。これまで、それぞれの都市国家の守護神の啓示によって社会秩序が保たれていたが、これらの国家を統合していく過程において、共通の秩序規範の必要性に迫られたに違いない。ここに、はじめて、霊的な啓示を伴った「コスモス」とは違った成文による秩序規範が生まれ、state としての性格をもった社会秩序が生まれたといっているだろう。この state の誕生は、霊的な存在から離れた都市住民自身の「空間の感覚」を予期させるものがあるが、それぞれの都市における部族支配や部族の神への信仰生活に大きな影響をおよぼさないまま、変化はなかった。

やがて、古代ギリシャ、ローマ時代になって、男性の自由民が投票を持って政治に参画するとともに、兵士としての共同体の防衛の義務を負うという都市国家における「市民」が発生する。これらの市民の政治が展開されるギリシャのポリスにおける公共空間が「アゴラ」であり、ローマ帝国における「フォルム」である。共和政体であった都市国家であったギリシャ、ローマにおいて、Cosmos が啓示される神殿から、「市民」によって構成された政治的空間への目覚め、「センス・オブ・シティ (Sense of City)」の萌芽を見ることは間違いないだろう。ローマ帝国においても、兵士の義務を負うことで、都市というハードをもって、豊富な物資、水、衛生を享受できる市民権を得る、という戦略を使いながら、領土を拡大、人民を統合していった。しかし、精神世界においては、ギリシャにおけるデルフォイの神託などが有名のように、依然として、「センス・オブ・コスモス」による秩序意識が強く、ローマにおいても、各地の土着の神を侵略することなく、その信仰を認めながら、それらの神をローマのパンテオンに一同に介し、それぞれの土地にあったコス

写真1



モスを尊重する多神教国家としてのローマ帝国という戦略をとった(写真1)¹。また、ギリシャ、ローマの「市民権」が意味するところは、他部族から侵略した土地をローマ帝国の構成員の私有財産として得られることであり、生産力の低かった時代、蓄財をするには、土地か労働力の搾取が必要であった。こうして、古代都市は、ウェーバーがいうところの「戦士共同体」としての軍事国家として軍事と奴隷制度に成立した社会であり、ローマにいたっては、富の蓄財は領土の拡大に他ならず、戦争に備えるために100万人以上の人口で膨れ上がる都市となった(ウェーバー1964)。皇帝はこれらの市民を統括するため、都市の生活様式、娯楽などを提供することで自分の威光を高め大衆統治・操作をした。そういったスタイルは、中世において興った商人や職人た

ちのメンバーシップによる都市の共同自治といった市民意識とはかけ離れたものであった。こうして、人々の精神生活におけるコスモスによる世界秩序は依然として続くが、4世紀初頭のローマ帝国における一神教であるキリスト教の国教化において、「センス・オブ・コスモス」の中心が、土着の神からキリストに転換、吸収されることになったのである。現在のフランスでクリスマスを「ノエル」と呼ぶが、その語源は太陽という意味で、土着の太陽神信仰とキリストの生誕を重ね合わせたことに由来している。またヨーロッパの各地の古い教会の地下には、土着の神が封印される形で眠っている造形の跡が多く散見される。国教化されたローマ帝国の各地でこうした土着神からキリストへの転換作業が図られた。

その後、ヨーロッパ世界は1000年あまり、世俗権力よりも宗教勢力の優位な農村を中心とした自給社会に入っていく。キリスト教が隆盛を極めた時期の絵画などには、完全に俗世を超越した神の姿が中心にあり、空間感覚において天上に大きな神、下に小さな人間が書かれていて、まさに「センス・オブ・コスモス」が、「センス・オブ・ゴッド」にとってかわられた空間認識の時代が長く続いたといえる。

また、中東諸国では、7世紀のムハンマドの出現によって、同じく一神教であるイスラム教が、土着の神からアラーへの変換、吸収がはかられた。イスラムにおける伝播は、ローマ帝国の覇権によるものと対照的で、アラーの神の前ではすべてが平等であるという価値体系のもとに、精神世界を共有するものであり、砂漠の神を戴いていた父権的かつ規律性の強い中東世界において、イスラムの教えは親和性があるものとして文化的伝播が行われていった。

ローマ世界とイスラム世界のこうした対比は、都市構造からも観察することが出来る。ローマにおいては、自らの文明を示すハードとして、その優れた土木技術から上下水道や交通網など都市を支えるインフラの機能性を高めるため、碁盤目状の区画を作り上げ、フ

¹ ローマ・パンテオンのドーム(出典: Attila Terbócs2006. ウィキペディアの規定により写真引用可)。ここには植民地支配する土地の神が多数奉られた。

ホルムや行政機能の拠点を中心に据え、城壁を囲むといった構成がとられ、宗教への介入はなかったが、空間的顕示による世俗権力の介入は存在していた。この方法論は、中国などにおいても採用されていて、機能性などにおいてはローマのそれとは違うが、権力の示威に空間的介入を行っている点においては共通性が見られる。一方、中東諸国においては、砂漠という気候条件や、部族間の争いから守るための必要性によって形成されてきた、伝統的な外部に対して閉鎖的かつ内部においても迷宮構造となっている都市構造がそのまま継承されていて、生活空間に対する世俗的権力の介入は小さかった点は、イスラム教における文化的価値観の共有が中東諸国における特徴であったことをうかがわせる。

5. 市民の発生～センス・オブ・シティ

ローマ帝国滅亡後、イスラムの価値観を共有するイスラム帝国圏域における貿易や情報など都市間ネットワークによるダイナミズムが、世界の富や技術の中心を、中東世界にもたらした。一方、中世の西欧においては、ローマ帝國的な覇権による拡大主義から、中央ヨーロッパの土地の肥沃さと、ゲルマンによる農耕技術の向上などもあって富の蓄積を自給ベースの農村社会から得ることができるようになった。やがて、これらの農村から生み出された富を、都市の市場において商人たちが取引することで商人たちのメンバーシップによる自治的な「シチズンシップ (Citizenship)」が育つようになった。ここにはローマの拡大的志向はなく、物資と情報の集積による都市空間を囲む商人集団、ギルドなどの共同体的な自治意識が育まれるようになった。やがて、それは自由な市民たちが、公共空間としての都市のあり方に興味をもつようになり、「政治」が生まれる過程ともいえる(加茂 1988)。

15～16世紀、イタリアの都市国家フィレンツェは、メディチ家の莫大な富によって築かれた都市であるが、フィレンツェでの政治を背景に活躍した思想家マキアヴェリは、著書『政略論』において、その政治の定義において、都市論から展開していることは興味深い(マキアヴェリ 1966)。そこで、都市を「すべての都市は、その地方の土着の人かよそから来た移住者によって建設される」として、「政体には、君主政、貴族政、民主政と呼ばれる3種類があって、都市を建設しようとするものは、自分の目的に一番適うものをこの中から選ぶべきだ」と述べている。マキアヴェリが想定していた都市とは、それまでの血縁や部族などによって統治されてきた都市ではなく、関係のない人々がそれぞれの目的(商売、軍事など)のもとで公共空間が形成される state であって、そこには新しい社会秩序を形成するための法なり、政体なりを意識的におこなわれなければいけない、という哲学が貫かれている。これは後年、エンゲルスが、『家族、私有財産、および国家の起源』で述べている国家の形成と問題意識が共通している、といえる(エンゲルス 1949)。

時代が下り、啓蒙思想の雄であるルソーは『社会契約論』においても、この思想をさらに拡大して、「この(社会契約に基づいてつくられる)公的な人格は、かつては都市国家(cité)と呼ばれていたが、今では共和国、または政治体 (corps politique) という名前をもっている」「近代人の大部分が、都会を「都市国家」(cité)と、また都会の住民を市民ととりちがえている。彼らは、家屋が都会 (ville)をつくるが、市民が citéをつくることを知らない。」と述べている。ここでは、単なる家屋、構造物の物理的連続体である ville と区別して、「都

市」を論じている（ルソー1954）。

これらの「都市の感覚」を近代的な文脈において、明瞭に定義したのは、マックス・ウェーバーであり、『都市の類型学』で、まず都市の条件として、ルソーの家屋による「まとまった定住」を *ville* として定義しつつ、「住民の圧倒的多数が工業的、商業的な営利から収入によって生活しているような定住」として都市の経済的特徴を定義した。（ウェーバー1964）しかし、彼はこれだけでは、「都市」という言葉は使えず、これらの条件に、*cit * としての共同体（ゲマインデ）の性格が有さなければ「都市」とは定義できないと述べている。都市におけるゲマインデの性格として以下の5つの点において定義している。

- 1) 城壁や堀のような防御施設があること
- 2) 自分自身の法と裁判所をもつこと
- 3) 団体の性質をもつこと
- 4) 自分自身の官庁やそのスタッフの選出・任命の権利をもつこと
- 5) こうしたことができる「市民」という身分の成立

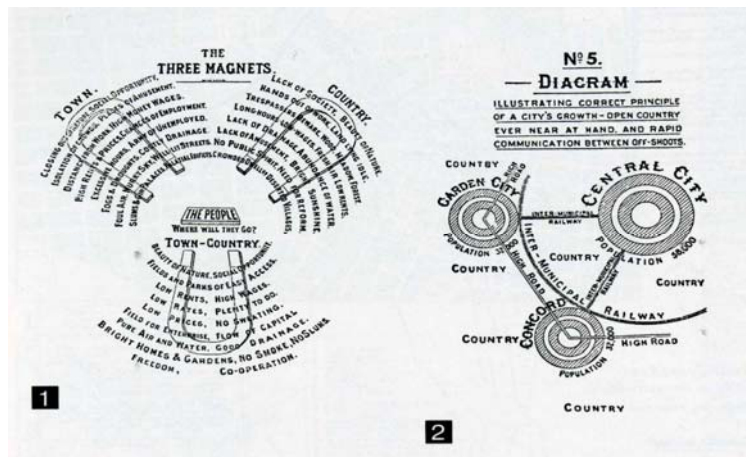
ウェーバーのこれらの定義の背景には、ヨーロッパにおいて、科学や合理的思考を育む文化、都市の伝統に、近代的な資本主義を生み出されたヨーロッパ固有の根拠として考えていた。つまり、都市に商工業の中心、市場があっただけでなく、市民の自治的な共同体が存在したことで、都市市民の自治が、民主主義や自由主義を生み出す土壌として資本主義成立の政治的条件を作ったと考えていた（加茂1988）。彼は、こうした仮説を証明するため、様々な都市の類型を試みて、一番「都市」の定義にふさわしい共同自治体的性格のもつ都市の特性を浮かび上がらせている。中でも興味深いのは、かつては富の集積地であった東洋世界において、なぜ近代化が起こらなかったかという暗黙の前提において、アジアとの比較を行っている点である。

「アジアの諸都市は、・・・今日知られている限りでは、およそまったく都市ゲマインデではなかったか、あるいは萌芽的な形でそうであったにすぎない。」「たとえば、日本において・・・自治行政権をもつ市街区ゲマインデ（町）の上に、最高の機関として一つあるいは数個の民治行政組織（町奉行）があった。しかしながら、古典古代や（西洋）中世の意味での都市市民権なるものは存在しなかったし、都市自体の団体的性格は知られていなかった。」（ウェーバー1964）

中世の間に、土地を介在しないモノの交易のみで富を蓄積するという都市を基軸とした経済行為は、やがて、モノを計量するという合理的精神を生み、それが科学へと発達した。こうした「センス・オブ・ゴッド」から開放された意識の目覚めが、イタリアのルネサンスをはじめとした、ヨーロッパ全土において用意されてきた中で、政治的な文脈における「市民意識（Citizenship）」も確固としたものとして生まれ、これらの精神世界の変化は、宗教改革などによる変化も準備したともいえる。都市における「シチズンシップ」は明らかに、人々のアイデンティティ、帰属意識において大きな変化をもたらし、都市という公共空間（政治的空間）における感覚として、「都市の感覚（センス・オブ・シティ）」を育んでいたといえるのではないだろうか。ここでの都市は、*state* を意味した *cit * と同義語であり、政治空間とも一体化した空間意識といっても過言ではないだろう。

図1

三つの磁石



「空間の感覚」への目覚めが起こるのである。

6. 工業社会の理想としての「均質空間」～センス・オブ・ユニバーサル・スペース

工業社会の到来は、それまでの商業的資本主義におけるシチズンシップによる自治共同体的な平衡状態から、資本を持つものが都市を占拠して自らの利益を追求する産業資本主義に移行した。そのため、資本家に使われた労働者の搾取状況は、エンゲルスの著作にも有名なおおり、過酷を極めた状況となった（エンゲルス 1990）。労働者の貧困問題はそのまま、都市問題の反映でもあった。無秩序な開発によって、工場の煤煙、汚水などの環境衛生や、暴利をむさぼる投機家たちによって、労働者たちの住む住宅は狭小で過密なスラムを生み出し、劣悪な衛生、設備などで疫病が蔓延した。産業革命の先駆国であったイギリスをはじめヨーロッパ諸国においては当初、博愛温情的な立場や社会改良的な立場から、衛生法や住宅法などが制定され、対処しようとしたが、社会主義運動の盛り上がりにおいて、「都市計画」という発想から、こうした都市問題を「市場の失敗」として認識して、公的介入を推進していく動きが、20世紀初頭に当時、新興工業国であったドイツにおいて先駆的に試みられた（日端・日笠 1993）。

一方、産業革命の母国であるイギリスにおいても、エベネザー・ハワードが、農村、都市の利点をそれぞれ兼ね備えた「田園都市」構想として、人々が都市の大資本に依存せずに3~5万人の都市において職住を一致させる自給的自治都市を提唱した（ハワード 1968、図1）²。空間への認識においては、都市は既に、中世的な自治都市から、資本家と労働者の階級対立抗争の場としての「分裂都市（Divided city）」の様相であり、ハワードの発想

² ハワードの田園都市構想における3つの磁石のダイアグラム（出典：都市史図集編集委員会 1999）。それぞれ街と田舎の長所・短所が上の二つの磁石に書かれ、下にはそれぞれが引かれあってそれらの利点が結婚したという表現で、田園都市を実現するという磁石が書かれている。

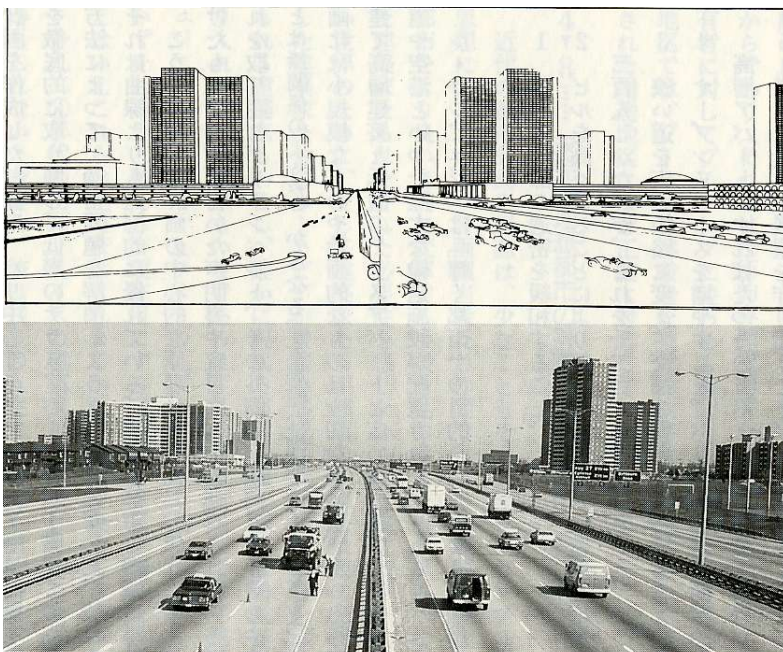
ウェーバーの推論からは、社会経済構造の変容が、人間における精神的世界の変革、価値観の変換をもたらして新しい空間的な帰属意識、アイデンティティにおいても大きな影響を及ぼし、その後の社会変革を準備したといえる。これらの流れが合流して、近代資本主義の幕開けとなった産業革命が始まる。そして、この産業革命によって、再び新しい

には、こうした分裂から近代的な意味における自治都市の再生への理想があったといえる。とはいえ、都市的機能、農村機能を一致させた都市機能を新たに計画的に作り上げるという点においては、それまでの都市の文脈や地域性の包含といった要素はなく、機能主義的な理論体系とっていいだろう。

一方で、近代における工業技術の発達も、都市の空間形成において、大転換をもたらしたといえる。ロンドンの万国博覧会におけるガラス宮の建築は、近代の建築の素材が鉄やガラスなどの工業製品にとって替わることを暗示していた。その後、パリの万国博覧会によるエッフェル塔の建設は、来るべき近代社会の象徴性をもっていても過言でないだろう。それまでの建築家と呼ばれる職分においては、建築を建設できる財をもつ王侯貴族や、ブルジョワといった人たちがパトロンであり、その建築様式において、階級的示威、差別化を図っていく「建築言語」を担ってきた。トゥアンは「言葉は感情を内に秘めていて、感情を強める。感情は言葉がともなわなければ一時的な高まりに達するだけで、すぐに消散してしまう。(中略) 建造された環境は、言語と同じように、感受性を明確かつ精妙にする力をもっているし、意識を鋭く大きくする力をもっている。建築がなければ、空間についての感情はいつまでも散漫ではかないままで終わってしまうのである。」と述べているが(トゥアン 1988)、これまでも建築家はパトロンであった権力者や財産家の意向を「建築言語」として様式化してきた。しかし、この時代の近代技術がもたらしたこれらの素材は、革新的な建築家たちに、それまでの基本的な建築構造の制約や、薄暗い部屋、階級社会の象徴性を暗示させる「石の建築」から解放させるものとして受け止められた。また、パトロンも、近代国家建設における公共建築や、当時、社会主義運動が盛んになる中で、労働者のための住宅を作ろうとした自治的な組織である「住宅組合」など、それまで王侯貴族やブルジョワといった顔の見える個別的なパトロンから、近代国家や労働者といった抽象的で普遍的な対象に変質した(グリーンバーグ 1990)。建築の革新性を求める建築家たちは、思想信条を問わず近代社会が実現しようとした機能的で普遍的な建築言語の表現意欲にかられた。このことは、同時に建築家が受け手としての「建築言語」の職人から、社会へ価値観を発信する「建築言語」の表現者として、立場が逆転した時代をも象徴している。こうした流れは、主に労働者の地位向上を意図する建築運動の発想から19世紀末期から発祥して、後にデカルト的な機械論的建築・都市計画理論を提唱するフランスのル・コルビジエによる「近代建築5原則の提唱」や、ドイツのパウハウス運動、ジードルンク運動、オランダのベルラーヘによる機能主義建築、ウィーンの集合住宅建設、イギリスのパトリック・ガデスによる自然と社会計画、都市計画の一体化を目指した生態学的都市計画理論など、それぞれの国において、近代における空間の普遍言語の追求がされるようになる。

このように各国の社会状況、文化的文脈において百花繚乱に展開された近代建築、都市計画の幕開けは、やがて、近代社会における理想として、工業社会によって万人が平等な生活条件を与えられ、近代言語としての建築はその理想の器であるという理念のもと、空間の機能性、均等性へと収束していく。

図 2



フランスの建築家ル・コルビジェは、近代の工業化時代にふさわしい人間の生活スタイルを目指すため、土地、空間の所有・利用の機能的かつ合理的な形態を提唱した。職・住・余暇の空間を分離して、それらを自動車中心の交通体系で結び付ける合理的な空間構成を構想している。高層建築による高密度な居住形態として、「オープンスペース」を多く作り、そこは緑に包まれ、太陽を浴び

ることができる「輝く都市」を建設しようという考え方であった。1927年、国際連盟本部設計コンペで、一度ル・コルビジェの案が当選しながら、保守的な建築家勢力によって頓挫させられた事件を契機に近代建築国際会議（CIAM）がスイスのラ・サラで結成された。社会平等の表現としての空間の均等化の考えはCIAMの理念にも影響を与えた。この機械論的都市計画の理念は、CIAM第4回大会によってアテネ憲章（1933年）として結実された（コルビジェ 1976、図 2）³。

こうして、社会階級からの建築言語の解放が実現したことによって、建築家たちの空間概念はさらに自由となって、その純粹化として「普遍的空間（ユニバーサル・スペース）」概念が、アメリカを中心に世界中を席卷していく。これは国籍や文化を超越した空間の言語性の普遍化の空間志向であり、空間に用途を指定せず、どのような用途にも対応できる機能性を兼ね備えた空間として、バウハウスからアメリカにわたったミース・ファン・デル・ローエらによって体現された（大川他 1997）。

こうした機能主義的概念は、第2次世界大戦後、欧米諸国における工業化による大量生産大量消費型の経済システムにも適合して世界中の都市を覆うこととなった。特に戦後復興が喫緊の課題であったヨーロッパにおいては、公共建築や、社会住宅建設を中心とした官主導型の建設、インフラ整備によって経済的牽引を図ろうという政策がとられ、公共性という問題と普遍的空間を追求した理念が適合し全面的に受け入れられた。

³ ル・コルビジェが描いた現代都市像とカナダ・トロント市の景観（出典：レルフ 1999）。1922年、ル・コルビジェがパリのサロン・ドートンヌで発表した「人口300万人の現代都市」のスケッチ。第2次世界大戦後、世界中で、このスケッチと同質の景観が現れるようになった。

図 3

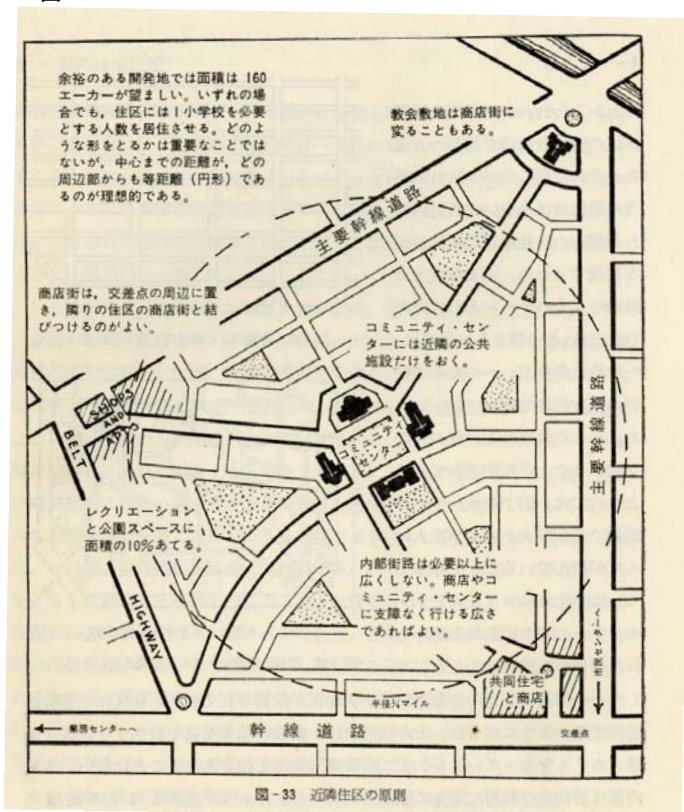


図-33 近隣住区原則

やがて、アメリカでは、特に 60 年代、豊かな中産階級は、モータリゼーションの進捗とともに、都市の喧騒から逃れて郊外へと移動するようになった。郊外の住宅地の建設においては、アメリカの C・A・ペリーが提唱した「近隣住区論」が理論的ベースとなって郊外化に対応しようとした。「近隣住区論」は、イギリスの E・ハーワードの「田園都市」構想に影響を受けながら、1920 年代、当時アメリカで盛んだったコミュニティ運動での自身の経験も含めて考え出された。小学校が一つ必要な程度の人口に対応した住区を構成して、自動車の通過交通を防ぐための内部の街路構造に合わせて、住区の周囲を大幹線道路で囲む。住

区は、住民の要求に応じた「オープンスペース」をもち、住民のサービスを提供する公共施設を中心部か公共用地の周囲にまとめ、人口に対応した適当なサービスを提供する店舗地区を設ける、といった原理を掲げている（ペリー1975、図3）4。

この近隣住区論、オリジナルの田園都市構想、CIAM の機械論的都市計画理論、いずれも、オープンスペース、緑地の享受といった希求が強く、現実的に権利関係が複雑な既存の都市部においては難しいこれらの開発が、新規の郊外開発地においてはそれが体现できた。中産階級の理想の居住空間を、アメリカにおいては民間を中心に、ヨーロッパにおいては、戦後まもなくは民間市場の力がなかったため、政府が積極的に社会住宅の建設の中に、これらの機能主義的理論による市街地形成を積極的に盛り込み、戦後のベビーブームによる住宅需要にこたえようとした。60 年代以降、核家族化とモータリゼーションの進行、また中央政府のマクロ経済政策の一環として、土地住宅不動産を民間市場に委譲することでさらに経済成長が図られるといった意図も後押しして、持家志向がさらに強まった。

これは同時に「都市の衰退 (Urban decline)」を誘発した。既存の都市部には、郊外に移動する財力を持たない移民や貧困層が集中し、バンダリズム、強盗、麻薬といった犯罪の巣窟となり、都市は活力を失った。一方で、郊外に出来た「未来空間」、「理想都市」においても、これらの普遍的空間が決して未来をもたらすものではなく、過去を断絶させ、人間のつながりやアイデンティティを疎外するものとして、その本質を露呈させはじめた。

4 ペリーの近隣住区論モデル図(出典：ペリー1976)。近隣住区論のモデルはアメリカだけでなく、イギリスのニュータウンをはじめ、日本のニュータウン建設など、各国の都市計画基準に採用された。その社会的影響において、ルイス・マンフォードなどの擁護者が多い一方で、ジェイコブスなどによる批判もある。

写真1



7. 機能主義的空間形成への批判～センス・オブ・プレイス、センス・オブ・ジ・アース

60年代までに世界を席卷した機能主義的近代都市計画の手法は、各地で限界が露呈された。その最も象徴的な事件としては、1972年のミノル・ヤマサキが設計したブルーイト・アイゴ一団地の爆破だろう(写真2)⁵。爆破の日が「近代建築が死んだ日」として呼称されるほど、この団地は造形的に近代建築の極致といわれ、建設された当初は絶賛された建築であった。

設計者で日系2世であったヤマサキは、アメリカの地でさまざまな差別と戦いながら、国籍や文化を超越した「ユニバーサル・スペース(普遍的空間)」という理念への絶対的信念を持って設計に勤しんできたことは、その自伝でもうかがわれる(Yamasaki 1979)。ブルーイト・アイゴ一団地の計画も、貧富の差や人種の違いによって差別されない公営住宅の理想を、平等な生活空間を提供するため、空間の均質化という形で、実現しようとした。しかし、この団地は出来てまもなく、バンダリズムが横行、麻薬の取引の巣窟となり、爆破されることになる。アメリカにおける残余的な住宅政策によって、福祉的措置として、貧困階層が公営団地に集中した背景に加え、ハード面における機能分離による空間構成によって、「公」と「私」の間の中間領域にあるセミ・パブリック(半公共的領域)を消失させ、住民の目や交流の領域が無くなり、公共的領域に対する関心や参加が失われることで、バンダリズム、犯罪などを発生させたことが指摘されている(Newman1972)。

この事件以前の1961年、ジェーン・ジェイコブスは、著書『アメリカ大都市の死と生(邦題)』において、「都市の4原則」を唱え、機能分離による都市計画はコミュニティを崩壊させて、都市を衰退させるものとして痛烈に批判した。当時、始まっていた「都市の衰退」のメカニズムをいち早く察知して、空間的な文脈における独自の社会関係資本概念を提唱した(Jacobs1961)。また、その後の著書『都市の原理(邦題)』においては、農村で蓄積された富から都市が形成されたという従来の都市起源説の定義を覆して、はじめに都市があり、都市の需要に応えるために農村が生まれたというテーゼを唱えたことは前述した通りだ。この著作では、農村におけるモノカルチャー的な生産構造に対して、都市におけるモノ・情報の多様性が文化・文明を涵養させるといった発想も示している(Jacobs1969)。その後の著書『都市の経済学(邦題)』において、さらに彼女は、経済単位を国家で測ることからの矛盾を説き、中世都市の経済の自律性から、経済活動の根本には都市活動があり、国家経済の基盤にあるのは都市経済であると喝破した(Jacobs1985)。

⁵ ブルーイト・アイゴ一団地爆破風景(出典:Hall 2002)。ブルーイト・アイゴ一団地は1951年にセントルイス市のスラムを取り壊し1956年に完成した。約23万㎡に11階建ての高層住宅が33棟造成され、総戸数は2870戸。やがて、バンダリズム、犯罪の温床となった都市計画の失敗例として、ニューマンなどの分析によって、環境犯罪学の進歩に寄与したといわれている。爆破日は1972年3月16日。

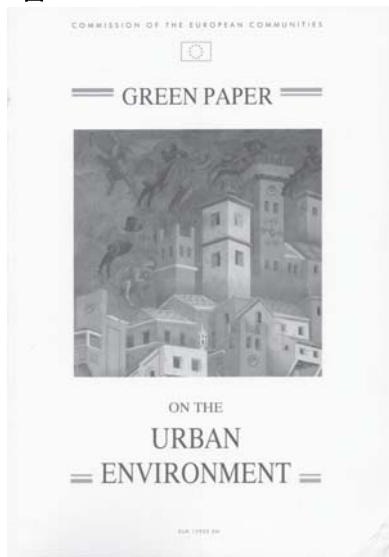
この主張は都市が衰退し、中央政府の財政赤字による圧迫に悩む欧米諸国に大きな影響をもたらした。また、空間的な視点からの彼女独自の社会関係資本へのまなざしは、その後の社会関係資本の議論における嚆矢としてみる事ができるだろう。

また、現象学的地理学者のイーファ・トゥアンによって、「トポフィリア」という言葉が生み出され、空間のもつ意味について考えられるようになったのもこの時期である。いみじくも、トゥアン自身が中国系アメリカ人といった出自から、コスモポリタンとしての意識の表明から、「センス・オブ・プレイス (Sense of Place)」といった概念の流れを創出した。このことは、人類が社会的文脈から「空間」を分離する試みに成功し、どの用途にも既定しないユニバーサル・スペースが、人間の空間に対する感覚から自らの実存的存在規定をいかに消失してきたかを逆説的に物語っている。それまで無意識に享受してきた空間の意味性について現代人が問わざるをえない状況が、「センス・オブ・プレイス」といった空間への自覚作業を生んだといえる。こうした空間の意味を問う文脈において、都市にそれらの意味性を取り込もうとした動きが出てくる。中でも、空間に対する認識論的立場から記号体系を整理して、理論体系を構築した人物としてケヴィン・リンチを挙げないわけにはいかない。それぞれ人間の空間認識において重要な記号を 5 つに分類し、エッジ、ノード、パス、ランドマーク、ディストリクトといった体系にまとめ、都市デザインを構成する手法は、現在も非常な影響力を持って受け入れられ、その手法は使われている (リンチ 1968)。

1970 年代に入ると、アメリカの都市計画家 C・アレギザンダーが、複雑系理論による都市計画理論を『パタン・ランゲージ』において体系化した。冒頭章の「町」において、「漸進的成長」というキーワードをあげて、漸進的に生成していく都市の構成を前提とした都市計画を提唱している (アレギザンダー 1984)。これらの提案は機能主義的な都市計画に対する反省であり、都市や都市活動の有機性を損なってはいけないという論点において、機能主義的発想で行き詰っていた計画理論から解放させる意味をもっていた。アレギザンダー自身の理論が直接的に汎用されたという事例はあまりないが、都市計画の理論体系において、今まで想定されることのなかった「複雑系」を応用した理論体系は、意識形成や議論においては非常に影響を与えたことは間違いない。

都市空間からの反省があった一方で、この時期大きく空間意識に影響を与えた潮流として環境問題の意識化がある。アメリカの NASA による月面着陸の成功によって、月から見える「地球」の映像は、人々の空間認識を 180° 転換させた事件であった、といっても過言ではないだろう。漆黒の宇宙空間の中、たった一つの青い美しい地球に住んでいる、というイメージは、開発に伴う公害問題などの噴出などと合わせて、環境問題への意識が盛り上がり、人間社会の開発行為への反省、見直しが図られた。1970 年、ローマクラブによる『成長の限界』の発表に続き、1972 年、環境問題についての初めての国際的会議である「国連人間環境会議」がストックホルムで行われ、キャッチフレーズの「Only one earth」などは、当時の人類の地球意識の高揚、あえて呼称すれば、「センス・オブ・ジ・アース (Sense of the Earth)」の出現がうかがわれる。一方で、空間における人間の実存的意味を問うプレイスと、よりマクロなアースといった空間意識の両極化は、70 年代以降における空間意識の多様化を予見させるものであり、ポスト産業社会における社会問題の複雑性と人々の価値観の多様化とも並行関係にあるものではないかとも考えられる。

図 4



その後、政策レベルにおいて、欧米では 1970 年頃より機能分離や自動車交通を中心とした都市形成からの脱却が見られるようになる。イタリアでは「歴史都市」の見直しを図り、都市計画において、既存の都市資源の維持・管理、再構築に舵を切替えた（民岡 2005）。また EU レベルにおいても、1990 年に発表された EC（当時）の報告書である『ヨーロッパ都市環境緑書』においても、機能主義的都市計画を批判する中で、機械論的なコルビジェだけでなく、ヨーロッパにおいても根強い支持者が多い E・ハウードの田園都市構想における機能主義的側面を批判したのは、意味が大きい（ECC1990、図 4）⁶。

一方で、政治学的な文脈においても、特に機械論的都市計画体系によって強められることとなった一部官僚、都市デザイナーによる計画権限の集中は問題視されること

となった。第 2 次世界大戦後の公的セクターの肥大化は同時に、専門官僚による独占的な計画スタイル、部門間による専門分化をも生み問題が複雑化した物的計画において、その実効性を全体性や硬直性において懐疑されるようになった。ハーバマスは、コミュニティ社会の縮小を「市場」の介入だけでなく、公的介入の拡大からも読み解き、公的セクターの肥大化、硬直性を問うことで、新しい「公共空間」の創出への政治学的な議論の端著をひらいた（ハーバマス 1985-87）。これらの議論は、市民参加を含めた協議プロセスの見直しが図られ、結果だけでなくそのプロセスが重視されるようになる。空間形成における計画において、個人、集団、地域、民族、国家のアイデンティティがそれぞれ交錯し、その中で、多様性が尊重されながら調整されていくプロセスの必要性が問われ始めた。ポスト産業社会を迎えて、経済的にも社会的にも環境面においても問題性が指摘され、複雑性を伴った社会動向に対応できない状況は現在も変わらない状況である。

8. 新たな空間感覚の胎動～センス・オブ・カルチュラル・リージョン

1989 年のベルリンの壁崩壊は、東西冷戦に終焉を告げた。これは同時に、自分は何者なのか？という存在規定を大きく膨れ上がらせるきっかけともなった。これまでの資本主義陣営と社会主義陣営という 2 つのイデオロギーによる大きな重石がとれ、それぞれの国、地域、民族、文化、宗教などの次元で、自らのアイデンティティは何なのか、が大きく問われた。1991 年、「7 つの国境、6 つの共和国、5 つの民族、4 つの言語、3 つの宗教、2 つの文字、1 つの国家」をもつと言われたユーゴスラビアで内戦が勃発したのは、まさにこうした新たなアイデンティティの揺籃が爆発した形での典型的な事象といえるだろう。1996 年、こうした帰属意識の揺れを、アメリカの国際政治学者のハンチントンが、7 つ、もしくは 8 つの文明圏（中華、日本、イスラム、ヒンドゥー、東方正教会、西欧、ラテン

⁶ 1990 年ヨーロッパ環境緑書表紙。13 世紀のイタリアの画家ジョットによって描かれた中世都市。1980 年代より都市再生が叫ばれるようになって、改めて中世都市における自律性、市民による共同統治などが見直されてきた背景がある。

写真 3



アメリカにアフリカを含める立場)に分類して、それぞれの価値観の中での「文明の衝突」を起こす可能性があるとして警告している(ハンチントン 1998)。アメリカの国家戦略を第一としたこの報告においては、専制的な性格を持つイスラム、中華文明が伸張する中で少なくとも、西欧文明は、民主的西欧的な価値観を共有するロシアやラテンアメリカを覆いながら、中国、イスラム諸国に対抗する必要性があったとした主旨で論理構成されている。筆者のこの議論における評価は、アメリカの世界戦略における秩序意識という点と、文明の分類に関して、宗教や文化などが交わり合っていて、その区別基準が明確でない点において、抵抗を覚えるものがある。しかし、この問題提起はむしろ、「文明」分類、主張の是非よりも、90年以降の多様化し混濁した世界

認識において、イデオロギー対立が背景となった世界において、文明や文化といった問題と空間的帰属意識が接近している状況にあることを意識させた点において意味があるものだと考えている。

こうした空間意識と文明、文化といった歴史の中で形成されてきた文脈の接近は、2001年9月11日のテロにおいて象徴的な形で顕在化したといえる。

この事件で再びあの近代建築の旗手であり、先述のブルーイト・アイゴア団地の設計をしたヤマサキの名前が現れるのである。9.11テロの際、標的となったWTCビルの設計者もまたヤマサキであった。彼は期せずして、二度もその建築を破壊されることとなったのだ。そして、この世界を揺るがした9.11テロの首班と見られるモハメド・アタもまた、カイロ大学で建築を、ハンブルグ工科大学において都市計画を学ぶ者だったことは興味深い。彼はエジプトの中産階級の生まれで、品行方正、成績も非常に優秀だったという。彼の卒業論文は、シリアの歴史都市アレppoの歴史的遺産に関するテーマであり(写真3)⁷、アメリカ主導のグローバリズムを表象する高層建築がイスラムの歴史的都市のよき伝統・アイデンティティを破壊している、といった主張をしていたという(朝日新聞アタ取材班2003)。彼の中ではWTCビルは、グローバリズムにおける問題を象徴する経済の中核という意味にあわせて、アラブ世界のアイデンティティを揺るがす象徴として見ていたのかもしれない。

その後、こうした反アメリカ、反グローバリズムを標榜したテロリズムは後をたたない。これらのテロリストのほとんどがアタも含めた青年層である。事件当時から(いまだになお)、彼らが古いイスラム社会に影響を受けて急進的な原理運動に傾倒しているという見方

⁷ モハメド・アタ卒業論文表紙(出典:朝日新聞アタ取材班2003)。アレppoの近代計画プランと伝統的イスラム建築や文様との対比、そして、こどもたちの笑顔から、アタの問題意識と葛藤が感じられる。

がされているが、これは正しくない。むしろ、グローバリゼーションが拡大する中で、自分のアイデンティティがどこにあるのか、資本の流動化によるむき出しの弱者排除による反発が彼らを原理運動に吸収している土壌といえる。彼らはイスラムの理想が現代社会においてますます遠のいていると感じているゆえに、イスラムの原理に立ち返り、イスラム社会を復興しようとしている。70年代、西欧社会において批判にさらされた機能主義的な都市計画は、開発途上国においては、むしろその経済的キャッチアップ過程において組み込まれて、現在もなお世界各地で空間的な画一化がされていく状況を推進している。アタもまたアレppoを通じて、イスラム都市の問題が、西欧的な合理主義のもとに、かつてのイスラムのコミュニティを崩壊させている、という主張をしていたといわれ（朝日新聞アタ取材班 2003）、こうした西欧の合理性の記号として、WTC センターをみなしていたのかもしれない。文化的アイデンティティを含んだ地域感情（ローカル・エモーション）の喪失は、アタのような若者をこれからも多く輩出するだろうし、イスラム世界に限らない状況といえる。

80年代からの都市のテーマは「都市再生」であり、金融の自由化によって、いずれも新自由主義的政策を展開したニューヨーク、ロンドン、東京が「ワールド・シティ（世界都市）」として君臨した。「世界都市」とは、経済の核を金融として、主体は多国籍法人や金融系ジェントリー、都市規模は大きく、世界のセンターとして君臨して、都市間関係においてはハイラーキーな関係を強いるグローバル時代の都市イメージの象徴である。（加茂 2005）90年代より、ニューヨーク、ロンドンはいずれもテロの標的として攻撃がされ、東京もまた、オウム真理教による自壊的な史上最大規模のテロが起こったという点において、学歴の高い若者たちが中心に、自らのアイデンティティや帰属意識の希薄さから、世界の秩序に対して破壊行動にいたった点で、問題の基盤は共通している、と筆者は考えている。これらのマグマが爆発する形での9.11テロは、常に「普遍」的理念を振り回してきたアメリカにおいて起こったことは象徴的といえよう。

90年代は、92年の地球サミットからの流れにおいて、都市においても「サステナビリティ」が提示された時代でもあった。環境分野、社会経済、文化的な文脈も含めた「持続可能な開発」という概念で、コミュニティの再構築、環境との共生、空間の質などを視野に入れた政策への視座を深めている。つまり世代間公平といった時間軸も加わった空間形成への方向性も示された時代であった（EU1996）。

経済のグローバル化の進行に伴い、都市の競争力がますます問われる状況下で、90年代後半から都市概念の主流として現れてきたのは、「クリエイティブ・シティ（創造都市）」である。この「創造都市」は、経済的目標としては「世界都市」と同じ指標の概念といえるが、経済の核を文化、芸術におき、主体は文化・情報・技術系の仕事に着く「創造階級」（フロリダ 2008）であり、都市規模は小さく、地域内循環からセンターへ価値発信を行い、都市間関係においてはネットワーク型と「世界都市」とは対照を成している（加茂 2005）。創造都市論においては、代表的な2人が体系的な理論をまとめている。一人はC・ランドリー（イギリス）で、彼は脱工業都市において、マルチメディアや映像・音楽などの創造産業の成長によって、芸術文化が都市住民に対して、問題解決に向けた創造的アイデアを刺激し、経済－文化－組織－金融への連鎖反応を起こすと主張していて、社会経済的な持続可能性の議論からも、文化的伝統がグローバリゼーションの中でもアイデンティテ

イをもたらし、未来への洞察をもたらす持続可能な都市を実現するための文化力として評価をしている。彼の「創造都市」の定義においては、

- ・芸術・文化のエネルギーにあふれて市民が十分に享受している
- ・芸術文化の創造性を生かした産業群が新たな雇用と富を生み出している
- ・市民の自治意識の強さ
- ・世界的な貧富の格差拡大などグローバル化の負の遺産解消のための人類普遍の価値行動がある

などがあり、持続可能な都市概念に則った端正な理論を構成している(ランドリー2003)。

もう一人は R・フロリダ (アメリカ) で、彼はアメリカでの実証研究をもとに、ハイテク指数やゲイ指数などから、その都市における人間への寛容性と創造性に正の相関関係を見出した。また彼の理論的特徴は、「創造階級」の定義で、コンピューター、建築、自然科学、社会科学、教育、芸術、メディアなどに関わる専門職を「超創造的中核」として創造階級の中心として位置づけ、また、創造的専門職として、マネージメント、ビジネス、法律、医師、セールスなどの職業人を、位置づけている(フロリダ 2008)。職業の質が新たな時代の階級を形成しているという指摘は、やはりポスト産業社会における新たな社会関係資本の出現とみることができるところだ。EU などにおける 90 年代の経済再生における都市再生政策において、経済活性化の都市ネットワークにおけるリージョン形成においてはこれらの概念が接着剤となって成功している地域が出てきている。

歴史的には同じ文化圏をもつデンマークのコペンハーゲンとエルスンド海峡を挟んで、スウェーデンのスコネ地方では、海峡を結ぶエルスンド橋の開通より、産業においては医薬品分野や研究・教育機関を一体化して、国境間による労働協約によって、産業基盤、人的資本の集積化を意図したエルスンド・リージョンを形成している。オランダの 4 大都市を結んだランドスタット・リージョン、ウィーンを中心とした旧ハプスブルグ文化を共有する都市とのネットワークによるリージョンなど、文化的な共通基盤がある地域においては、国境をまたぐ例においても比較的成功している。社会経済政策としてのリージョン形成において、文化政策の比重がますます大きくなり、文化による社会統合プロセスがむしろ、グローバル経済における都市競争においても大きな要素となってきている。つまり人々の帰属意識、アイデンティティ、社会参加も含めた空間的領域の発生が、社会、経済、文化・宗教などを統括した形で空間意識の形を変えつつある。ジェイコブスが予見したように、EU においては、文化的親和性において、これまで国が担ってきた経済的単位も解体され、都市やリージョンの単位での成長の推移を示すようになってきた。こうした文化的次元と社会経済的次元に緊密な関係性が生じて形成しつつある生活圏の形成は、アイデンティティにおいて文化的な帰属圏と、それと親和性を示しつつある経済圏がつながりつつ、地域感情の高揚が図られている。このような状況は、まさに空間の感覚における「センス・オブ・カルチュラル・リージョン (Sense of Cultural Region)」といったものを形成しているのではないかと想像している。

現在、都市政策において創造都市戦略は、ヨーロッパの都市においては不可欠な戦略としてなされている。例えば、オランダのアムステルダム市は「Broedplaats Amsterdam」プロジェクトを展開していて、2003～2008 年の間に 24 の文化プロジェクトに 10 億ユーロ (約 1400 億円) を個人で活動しているアーティストや文化起業家に仕事の場所を提供し

ている。市都市局の調査では、2000年～2005年の間に3200万ユーロの融資がされ、37の「Broedplaats」(文化孵卵場)、700の仕事場を提供し、48000 m²増加した、という熱の入れ様である(Gemeente Amsterdam 2006)。こうしたアプローチは、単純な経済力強化という側面ではなく、これまで社会的に疎外されてきた貧困層や移民層へのエンパワーメントとしての側面も大きい。オランダの移民層が、ホテルなどの小規模な対人サービスや文化的事業において起業している割合が高くなっていて、文化や創造分野においては、社会的包摂の有効な手段の一つともなりうることを提言されている(Kloosterman2003)。

また、都市計画理論上の議論において、郊外団地の社会空間や環境との共生など統合的アプローチへの関心は、概念や理論的な議論をもたらした一方で、計画プロセスにおける多くの市民や団体の包摂といった計画策定上の問題における関心も大きくなったといえる。これまでの技術的、物理的アプローチでは、もはや現実に対応できず、政策決定過程における政治的議論なども援用しながら、計画プロセスの模索が行われている。1980年代、ハーバマスは福祉国家の議論において、「生活世界の植民地化」を説いた(ハーバマス 1985-87)。コミュニティ世界の自律性の喪失は、市場セクターの拡大のみならず、市場の失敗の統御から拡大してきた公的セクターとの関係性でとらえようとして、そこから公共性の転換へと方向付けられた議論は、政治学だけでなく、肥大化して硬直した計画セクターの問題としてもとらえられた。また、1990年代、政治学者のドライゼックなどが議論の俎上にあげた、Communicative Rationality 概念などを援用して、これまでの物的計画における手段的合理性ではなく、それぞれ異なった事象における交互の交流、つまりはそれらを楽しむすべての人間である市民なども含んだ計画の策定を意図して、空間の形成がされようとしている(De Roo2007)。

これらの市民、多様な主体の参加プロセスの発達によって、それによって作り上げられた空間に対して、人々がどのような空間意識をもつのかもまた興味深い。中世の自治都市に見られたような市民的感觉における空間共有がそこにはあるかもしれないが、更なる新たな感覚も生まれてくるかもしれない。

9. 結語

都市の形成史において空間の感覚を、近代化の過程を経た西欧社会におけるそれぞれの時代の社会システムや精神世界の変遷に焦点をあてて、述べてきた。日本においては、一神教的な God は一般的にならず、ウェーバーが指摘したように、戦国期の堺などでその萌芽は見られたものの市民による自治都市は生まれないうまま、都市は ville のままで、農村における「ムラ」が空間感覚を担ったまま、近代化を迎える。キャッチアップ型の急激な近代化における社会統合の過程で、この「ムラ」における素朴な信仰心などを国家神道という回路に統合して、ネーションから国民国家(ネーション・ステイト)へと移行させようとした。このムラと国民国家における官僚的な統治意識の二極構造は、第2次世界大戦後、解体されたかに見えたが、ムラはカイシャに変わり、官僚的な統治意識は変わらないまま受け継がれている。

現在は、特に若者世代における社会からの孤立は、自分の部屋の中ですべてが事足りる「センス・オブ・ルーム (Sense of Room)」ともいうべき空間意識すら醸造している状況

がある。明らかなのは、西欧的な空間意識とは独自の違った経緯を歩んでいて、空間における帰属意識などにおいても市民性や公共性への関与といった関心よりも、私的な趣味や身近なおもしろいものへのこだわりのほうが強いといえる。いわゆる「アキバ」空間のような自分たちの嗜好に偏向した空間形成においては、独特の感性を見せていて、その空間創出がまた世界的な文化トレンドとして珍重されつつもある。しかし、個人の公共空間からの孤立は、居住空間による空間格差も起きつつある状況においては、社会との関わりをますます希薄にさせ、人々の帰属意識やアイデンティティがますます私的空間へ埋没してしまうという危惧をもつ。社会との接点が希薄な若者が、突然社会に放り出され、しかも派遣労働やフリーターといった不安定な雇用条件において人間的な扱いを受けず、ますます精神的に浮遊していく状況が膨らんできている。そうした過程で、帰属意識を求めて、右翼的な「愛国」へ吸収され、たとえば、中国や韓国に対する感情的な反発などによって、辛うじて精神的な安定を図っている若者も多いという（雨宮・萱野 2008）。

日本人の空間意識の基層はどこにあるのかということを検討しつつ、現代的な意味での都市形成における市民の空間への参加、コミュニティ空間の創出は、やはり今後のこの国における健全な「帰属意識」の問題と相まって重要な問題となってくると考える。

<参考文献>

- 朝日新聞アタ取材班(2003)『テロリストの軌跡——モハメド・アタを追う』草思社
- 雨宮処凛・萱野稔人(2008)『「生きづらさ」について——貧困、アイデンティティ、ナショナリズム』集英社
- アレギザンダー,A(平田翰那訳)(1984)『パタン・ランゲージ』鹿島出版会
- 伊東俊太郎(1985)『比較文明』東京大学出版会
- ウェーバー,M(世良晃志郎訳)(1964)『都市の類型学』創文社
- エリアーデ,M(風間敏夫訳)(1969)『聖と俗——宗教的なるものの本質について』法政大学出版局
- エンゲルス,F(西雅雄訳)(1949)『家族、私有財産、および国家の起源』岩波書店
- エンゲルス,F(一條和生・杉山忠平訳)(1990)『イギリスにおける労働者階級の状態——19世紀のロンドンとマンチェスター』岩波書店
- 大川三男他編集(1997)『図説 近代建築の系譜——日本と西欧の空間表現を読む』彰国社
- 加茂利男(1988)『都市の政治学』自治体研究社
- 加茂利男(2005)『世界都市——都市再生の時代のなかで』有斐閣
- 岸由二(1996)『自然へのまなざし——ナチュラルリストたちの大地』紀伊國屋書店
- グリーンバーグ,D(矢代真己訳)(1990)『オランダの都市と集住——多様性の中の統一』住まいの図書館出版
- コルビジェ,L(吉阪隆正訳)(1976)『アテネ憲章』鹿島出版会
- 民岡順朗(2005)『「絵になる」まちをつくる——イタリアに学ぶ都市再生』日本放送出版協会
- トゥアン,Y(山本浩訳)(1988)『空間の経験——身体から都市へ』筑摩書房
- 都市史図集編集委員会編(1999)『都市史図集』彰国社
- ハーバマス,J(丸山高司他訳)(1985-1987)『コミュニケーション的行為の理論(上・中・下)』未来社
- ハワード,E(長素連訳)(1968)『明日の田園都市』鹿島出版会
- ハンチントン,S(鈴木主税訳)(1998)『文明の衝突』集英社

- 日笠端・日端康雄 (1993) 『都市計画 (第3版)』 共立出版
- フェイガン, B (東郷えりか訳) (2005) 『古代文明と気候大変動』 河出書房
- フロム, M (鈴木晶訳) (1959) 『愛するということ』 紀伊国屋書店
- フロリダ, R (井口典夫訳) (2008) 『クリエイティブ資本論——新たな創造階級の台頭』 ダイヤモンド社
- ペリー, C (倉田和四生訳) (1975) 『近隣住区論』 鹿島出版会
- マキアヴェリ, N (会田雄二訳) (1966) 『政略論』 中央公論新社
- マンフォード, L (生田勉訳) (1974) 『都市の文化』 鹿島出版会
- ランドリー, C (後藤和子訳) (2003) 『創造的都市』 日本評論社
- リンチ, K (丹下健三・富田玲子訳) (1968) 『都市のイメージ』 岩波書店
- ルソー, J (桑原武夫・前川貞次郎訳) (1954) 『社会契約論』 岩波書店
- レルフ, E (高野岳彦・岩瀬寛之・神谷浩夫訳) (1999) 『都市景観の20世紀——モダンとポストモダンのトータルウォッチング』 筑摩書房
- De Roo, G, Porter, G (2007) *Fuzzy Planning*, Ashgate
- ECC (1990) *Green Paper on The Urban Environment*
- EU (1996) *European Sustainable Cities: Report*, European Communities
- Gemeente Amsterdam (2006) *On Course Urban development in Amsterdam, 1994-2006*, Gemeente Amsterdam
- Hall, P (2002) *Cities of Tomorrow* (Third edition) Blackwell publishing
- Jacobs, J (1961) *The Death and Life of Great American Cities*, Vintage
- Jacobs, J (1969) *The Economy of Cities*, Vintage
- Jacobs, J (1985) *Cities and the Wealth of Nations Principles of Economic Life*, Vintage
- Kloosterman, R (2003) Mixed Embeddedness and Post-Industrial Opportunity Structures, Musted, S
Salet, W eds. *Amsterdam Human Capital*, Amsterdam University Press pp331-358
- Newman, O (1972) *Defensible Space: Crime Prevention Through Urban Design*, Collier Books
- Yamasaki, M (1979) *A Life in Architecture*, Weatherhill, New York